

# 川を渡る静御前

内藤 浩誉

はじめに

しづやしづ しづのをだまき くり返し

昔を今に なすよしまがな

こう詠じた静御前は、平安末期に活躍した白拍子といふ。源平合戦で活躍するも、兄頼朝の不興を買った源義経は、奥州平泉の藤原秀衡を頼つて都を逃れた。「悲劇の英雄」という印象によつて「判官贔屓」という言葉が生まれたのは、周知のことである。その義経を取り巻く人物の一人として、静御前も様々な文芸に登場する。今なお全国的に伝説は語り継がれており、それらを集め分析すると、その特徴は、大きく二つに分けることができる。

一つは、母・磯禪師との関わりが深く、故郷に戻つたとする西日本型。もう一つは、義経の跡を追慕したという東日本型である。また、雨乞いを見事に成就させて有名になつた白拍子・静御前は、水

日本型は海辺沿いの、東日本型は陸の街道沿いの水辺である、といふ傾向が見られる。

こうした事例の中で今回取り上げるのは、北陸・富山県富山市水橋町の静御前伝説と、北関東・群馬県前橋市の静御前伝説である。この二つには、逃避行を続ける義経一行の一人として登場する前者と、義経を追つて来たがそこで亡くなつたという後者の相違点と、静御前が「川を渡る」という共通点が見られる。

ここでの「川を渡る」というテーマは、果たして何を意味するのであろうか。伝説の成立における主人公の果たす役割や意義とは何であるのか。そして、土地の歴史や風土が、背景として伝説にどのような影響を及ぼし、人々の生活の中でどのような意味を持ちながら関わっているのか、考察をしていきたい。

義経の人生は、前半の華やかな活躍ぶりから一転、後半悲劇的な

末路をたどるという波乱かつ対照的な展開が特徴であり、より一層のドラマ性を生み出している。

義経が都を離れ奥州の藤原秀衡を頼る時、「義経記」卷七「判官北国落の事」では次のように記される。

文治二年正月の末になりぬれば、大夫判官六条堀川に忍びおはしけるとも聞こゆ。また嵯峨の片辺りに隠れおはしますなどと申して、都には判官殿故に、人多く損じければ、義経は民の煩ひ出で来、人々數多損ずるなれば、如何にもして陸奥へ下らばやと思召す。此處彼処にありける侍共を召されける。十六人の者共、一人も心変わりなくて参りけり。

義経、「奥州へ下らんと思ふに、何れの道かよくあるべき」と仰せられければ、各々思ひ思ひに申しけり。「東海道にぞ名所ども候ひて、御慰みも候はんずれ。東山道は切所數多候へば、自然の事もあらん時は、除けて通るべき方なし。北陸道は越前の國、敦賀の津より船にて、出羽まで御越し候はんは然るべし」と申しければ、道つかいは北国にぞ定められける。

文治二年正月の末、義経は供を連れ北陸道を経由し奥州へ下つた、とされる。北陸地域は、義経を扱う芸能の数多い演目の中でも舞台として登場し、現在も義経一行に關わる伝説を聞くことができる。越中・富山における義経伝説として、管見のものを次にまとめた。

〔表〕・越中（富山）の義経伝説

西礪波郡福光町 定竜川 弁慶が踏んだ足跡の甌穴

海士が瀬：海士が現れ義経一行に浅瀬を教える

福光町  
高窪

一行の愛妾が義経落胤を出産、子孫は大笠家となる

東礪波郡井口村  
城端町

大野  
長者の娘・お鈴が義経落胤を出産  
弁慶が山を運ぶ（丸山・大山）

岩屋堂川  
岩屋堂川

弁慶の手の跡の岩  
義経雨晴岩

五箇山  
高岡市  
小矢部市  
松尾  
鼓が滝：滝の音で静御前をしのぶ

弁慶が背負ってきた巨岩天柱石  
弁慶がお手玉にした大石

平村  
頭川  
雨晴

弁慶が背負ってきた巨岩天柱石  
弁慶がお手玉にした大石

新湊市  
如意の渡  
(六渡寺)

義経腰かけ石  
義経雨晴岩

岩瀬街道  
弁慶の足跡岩

義経一行と見破られそうな所、弁慶の機知で回避する

富山市  
山王町  
水橋町  
島等  
岩瀬街道  
義経の鎧掛け松  
弁慶石（義経腰かけ石）  
観音像・厨子・上衣・唐鏡・義経

一行が宿泊し、礼に授ける

これらの伝説には、

- 一、義経に継ぎ、弁慶に関わる伝説が多い。
- 二、石や岩にまつわる内容が多い。
- 三、怪力ぶりが強調されている。
- 四、「雨」という天候もひとつのかぎわードである。  
という特徴が挙げられる。

ここで注目したいのは、義経落胤の子孫が長者として繁栄していく福光町高窪や、井口村大野での例である。『日本の伝説24 富山の伝説』<sup>(2)</sup>で採集された伝説を紹介する。

#### ○東礪波郡井口村大野

城端町の東北に隣接する井口村の大野部落には義経落胤伝説がある。兄頼朝に追われて都落ちし北陸路を潜行して奥州へのがれようとしたおり、弁慶、愛妾、その他の家来など十三人を連れて、夕ぐれにこの地に着き、長者権兵衛に頼んで、同家に三日三夜宿泊していった。そのとき一人娘のお鈴が義経のお伽をし、愛寵を受けて妊娠し、十月後に男児が出生した。権兵衛は義丸と名づけて愛育し、義経の亡きあと、わが家の孫として

家を継がせたところ、家運が榮え、義経の血を受けたためか、美女が多く生まれたそうである。

#### ○西礪波郡福光町高窪

福光町と石川県金沢市の北西部境に近く南蟹谷地区高窪がある。昔、大笛という旧家があつて、源義経の落胤の子孫であると伝えていた。加賀の安宅の閥所の難闘を通過した義経主従三人がこの村へさしかかったとき、妊つていた愛妾のひとりがにわかに産気づいた。義経は小者ひとりを付添わせて居留させた。その後、男児を安産したが、義経が亡くなつたので、そのまま、母とともに高窪に永住し、大笛家をおこしたといわれる。同家では、義経が遺していた、源氏伝来の守り刀を家宝とし、笛龍胆の紋章を家紋として、子々孫々の今に至るまで伝えているそうである。

越中での義経伝説において関わる女性を見ると、義経の男児を出産する地元長者娘が「お鈴」という名であつたり、静御前または静御前を彷彿とさせる愛妾である、という点は、義経をとりまく女性の一つの型として注目すべきことではないだろうか。つまり、東北・北陸においてしばしば「しづ」は「すず」と発音されることを合わせ考慮すると、義経に関わる女性の名が元來「しづ」であることに一つの意味が見いだせよう。それゆえに、静御前も後生まで人々の心にとどまってきたのではないか、と考えられるのである。

## 二

さて、今回挙げる例は、富山市水橋町畠等に伝わる義経伝説である。

まず、資料I『北国奇談巡杖記<sup>(3)</sup>』卷之一に記載されている、義経一行の様子について挙げる。

#### 越中國之部「静御前の上着并団子の来由」

同國新川郡、常願寺川の北岸に、畠等四郎左衛門尉といふ一

村一人の百姓あり。この者の先祖を尋るに、保元年中に、讃岐院の御味方に候したてまつるゆゑ、乱世の、ち都を落て、爰に來り住し、農業しありけるに、文治年中、源の義経主従十四五人ばかり、偽相の山伏となりて、此ところに來り、四郎左衛門尉に浅瀬をとひたまふ。四郎左衛門瀬踏して、浅瀬を越さしむ。

後世このところを海士が瀬と号けるとかや。是よりいかなる洪水にも此瀬を涉るもの、誤つて水に溺る、ことなしとかや。しかるに其夜四郎左衛門の家にとゞめて、ひそかにてもなし、御名をあかさせたまへと申けるに、義経も其志ざしの深きにめでゝ、しかぐ語りたまふ。左衛門憐愍甚だしく、其弟なるもの、滑川浦に居住しありけるを招きて、斯のよしをかたらひ、議ひして、越後国寺泊といへる所まで送りとゞけ奉る。義経、四郎左衛門が情を感じ、御身にそへたまひし、守仏十一面觀世音の像、御厨子とも三寸六七歩ばかりなるを贈りたまふ。静御前も唐綾の上着一衣に、唐の鏡一面、覆は堆朱のごとくなるを四郎左衛門にたまひしとぞ。〔頭書〕蒿蹊按に、静は北国に従はず。童形の体にて従はれしは、平大納言時忠の女、御本妻の卿の君でかゝれば恐らくは静にはあらず。卿の君なるべしや。いぶかし。」かく

名残おしみて藤の実を搗き、団子となして門出を祝しけるとぞ。今に二月下旬このところに祭りて、家毎に団子をとゝのへ、軒端々々に三方に飾りまうけぬ。是を藤団子と称す。畠等が家今に榮て、唐鏡と御仏とは存伝せり。彼上着は小社に祭れりといへり。志の人は尋ね行てその実基を見たまふべし。

『北国奇談巡杖記』は、金沢の俳人・鳥翠台北墓が俳諧修行のため巡行した際見聞した奇談・古伝を、二十年にわたつて書き留め、文化四（一八〇七）年に刊行した書物である。記事の珍しさや多彩さ、『平家物語』『義経記』に関する伝説記載の多さが特徴といわれている。

#### 「静御前の上着并団子の来由」をまとめると、以下の通りである。

文治年中、偽の山伏となつた源義経主従十四・五人が、常願寺川北岸の畠等四郎左衛門尉という一村一人の百姓の元に宿泊した。その時教えられ越した浅瀬は、「海士が瀬」と呼ばれるようになり、その後どんな洪水でも渉る者が溺れることはないと言われている。四郎左衛門の家でもなされた義経は、四郎左衛門の弟が住む滑川浦から籠で越後・寺泊まで送り届けられることになり、札として義経は十一面觀世音像と厨子を、静御前は唐綾の上着と鏡を四郎左衛門に贈った。四郎左衛門は藤の実団子で門出を祝し、以来二月下旬には家毎に団子をととのえ、軒の端々に下げて祀るようになった。文中に登場する静御前に対し、この書に序文を寄せた伴蒿蹊は、「静は北国には同行しなかつたはずだから、これは本妻の卿の君ではないか」という指摘をしている。しかし、小見出しに「静御前」

と断つてゐることを考えると、筆者自身はここに登場する女性を「静御前」と聞いていた、つまり当時の当所では、同行の女性は静御前であると伝えられていた、と考えるべきではなかろうか。

現在、富山市水橋町畠等を尋ねると、花井弘義氏（大正十一年生）宅で義経伝説を伺うことができる。そこで伝えられている内容は、次に掲げる資料で確認したい。

## II 『越中郷土史物語 童話 源義経<sup>(4)</sup>

### 話方

僕ノ家デハ毎年五月廿四日三草餅ヲ搗イテ親類ヤ知ル邊へ配

リテ祝フノヲ一ツノ家例トシティマス。其訳ハ今ヨリ八百年程前文治ノ昔源義経公ガ梶原ノ讒言ニヨリ兄頼朝公ト不和ニナラレテ奥州ニ降ラル、トキ主従十一人山法師ノ姿トナリ越路ヲ經

海岸ニ沿フテ安宅ノ関カラ水見雨晴岩瀬ノ浜ナドヲ過ギ我ガ水橋海岸ニ着カレマシタ。常願寺川ヲ渡ラフトナサッタガ五月雨ノタメ大水デ渡ルコトガデキマセンノデ止ムナク川岸ニ添フテ上流ノ方ヘト上ラレマシタ。其時松や杉ノ沢山茂ツテイル中二ツノ小サナ社ガアリマシタ。其レハ島等八幡宮デ誰デモ知ツ

テイルアノ一本杉ソノ古跡デアリマス。義経公外一同ハ恭ヤシクお参リシテカラ百間程東□ビアル一軒家ヲ見附ケテ尋

ネラレマシタ。家ノ繞リハ堀デ南側ニ馬場屋敷ト云ツテ馬ヲ乗リ馴ラス靈ガアリマシタ。主人ハ衛門ト言ツテ僕ノ先祖デアリマス。  
テイルアノ一本杉ソノ古跡デアリマス。義経公外一同ハ恭ヤシクお参リシテカラ百間程東□ビアル一軒家ヲ見附ケテ尋ね  
相ノ木辺カラ上納米ヲ川舟デドン／＼運ビ出サレ今ノ印田町ノ先ニアツタ御倉ニ納メラレタノデス。時々地面ヲ堀ルト黒ヅンダオ米ガ出マス。今ハ御倉町ト言ツテイマス。常願寺川ハ明治

川ガ中、減水セヌノデ一夜ノ宿ヲ乞ハレマシタ。主人ハ喜ンデ草餅等ヲツキテ義経公一同ヲ厚クモテナシマシタ。三日間逗留セラル、ト漸ヤク雨が晴レ水モ減ツタノデ出立チノ用意ヲセラレ主人ニ傘、盃、金剛杖、矢簇ノ四品ヲ下サツテ袂レヲ告ゲラレマシタ。主人ハ別レヲ惜シテ川岸迄見送リマシタ。未ダスッカリ水ガ減ラナイノデ渉ルニ困ツテ居ラレルト何處カラ力一人ノ海士ガ現レ來リ向岸迄負ツテ渡サウト言、マシタ。義経公喜ンデ海士ノ背ニ負ハレ淺瀬ヲ探ツテ渡ラレマシタ。武藏坊辨慶ヤ常陸坊、伊勢三郎、外一同其跡ニツイテ無事渉ルコトガデキマシタ。義経公海士ニ向ツテ礼ヲ述べ名前ヲ尋ネルト名ヲ名乗ラズ姿モ見イナクナリマシタ。一同大イニ驚キ且ツ悦ンデコレ日頃崇拝セル八幡宮ノお護リナリト地ニ伏シ遙カニ再拝シテ奥州ニ急ガレタリト云フコトデス。

明治初年頃迄ハ此日ヲ一村ノ祭日トシティマシタ。

文治以来常願寺川ヲ海士瀬川トモ言、渡ラレタ所ヲ海士瀬ノ渡シト言、マス。交通開ケザル七十年程前ハ富山ト通ズル近道トシテ唯一ノ渡船場デアリマシタ。其附近ノ地名ヲ字舟畠、字尼ヶ瀬ト名附ケテ今尚ホ残ツテイマス。

東西両水橋ニモ天瀬ト云フ名称ヲ種々ケラレテアリマス。□  
圖ハ明治初年ハ白岸川ト常願寺川ト合流シテ居テ三郷、上条、相ノ木辺カラ上納米ヲ川舟デドン／＼運ビ出サレ今ノ印田町ノ先ニアツタ御倉ニ納メラレタノデス。時々地面ヲ堀ルト黒ヅンダオ米ガ出マス。今ハ御倉町ト言ツテイマス。常願寺川ハ明治

廿四年上流ノ此ノ辺デ切レ大災害トナリ愈ヤク改修セラレ口ノ様ニナツタノデアリマス。時間ノ関係上コレデ終リト致シマス。

昭和十年十月廿九日

富山県教育研究会 発表 花井弘義

III 『畠等のあゆみ<sup>(5)</sup>』

〔源義経ノ遺蹟〕

一、文治三年五月十日源九郎義経主従十二人潛行シテ各道士ノ姿ヲ装ヒ西ノ方海岸通り水橋ニ到リテ常願寺川ヲ渡ラントス會、梅天霖雨ニ際シ常願寺川漲溢シテ渡ル能ハズ、主従大ニ難ム。當時ノ水橋ハ素ヨリ人家ノ在ルナク唯茫漠タル草原ニシテ、義経主従ハ宿ラント欲スルモ、家ナク頗ル難シタリシガ、河流ニ沿ヒテ上リシニ、郊原ノ中ニ、一小社アリ。即チ當村八幡社ニシテ、義経ノ一行ココニ参拝セラレ、傍ナル民家ニ到リテ、一夜ノ宿ヲ乞ハル。コノ民家ハ即チ我家ニシテ、文治ノ頃ハ衛門ト称シ居レリ。衛門快諾シテ、之ヲ歓待シ滞留スルコト三泊。水量、漸ク減ジタレハ義経主従出立セントシ、去ルニ臨ミテ、金剛杖、盃、笠、履物ノ四種ヲ衛門ニ贈ラル。衛門別レヲ惜ミ送リテ、河岸ニ到リシガ、主従ハ浅瀬ノ知レザルニ躊躇セリ、偶々一人ノ海士來リ、義経ヲ負ヒ浅瀬ヲ涉リテ對岸ニ達スルヲ得シメタリ。義経海士ノ名ヲ問フ、對ヘズ、忽チ其姿ヲ失ヒテ、見エザリシト、ココニ於テ義経、暫ク對岸ニ立チ止マリ、八幡

社ヲ礼拝シテ去レリトイフ。是レヨリ、コノ渡ヲ、海士ヶ瀬ノ渡ト呼ヒ其附近ノ地ヲ、字尼ヶ瀬ト名ヅケ、常願寺川ヲモ、海士瀬川ト称スルニ至レリ。

一、辨慶餅 義経滯留中、衛門ソトメテ之ヲ歓待シ、草餅ヲ搗キテ餐シタルコトノ故例ニ因リ、我家ニテハ古来、毎年五月十四日ニ草餅ヲ搗キテ、親戚故舊ニ配ハル例トナセリ。近年農作物ノ不振、勤儉貯蓄ノ世論ニ上リシヨリ、稍頻シ僅ニ故例ニ做ヒテ、近キ親戚ニ配ハルノミ。

一、海士瀬渡ト地方ノ名称。義経ノ事蹟アリテ以来、當地方ニハ海士瀬ノ名称ハ、非常ニ汎ク用ヒラルニ至レリ。西水橋小學校ノ嘗テ天瀬小學校ト命名シタルコトアルハ、「海士」ト「天」トハ、訓讀同ジキニ因リタルナリ。其他「海士」ヲ尼、天ニ通シテ、或ハ歌ニ詠ミ、或ハ浴場ノ名ニ附シ、或ハ團子ノ名等ニ附スルハ皆顧客ノ耳ヲ、新ニセントノ和用ニ外ナラズ。一、地中ノ遺物 八幡社附近ノ土中ヨリハ、往々古代ノ土器様ノ物ヲ堀り出スコトアルモ、心附カズシテ、一モ保存スルモノアルベシ。按スルニ古杉ノ下地中深クニハ、今尚埋存スルモノアルベ

シ。此ノ地古代ヨリ我家ノ祖先ノ住メル土地ナリトハ累代子孫ニ口傳ヘトナリテ、今ニ至ルモ、何等文献ノ徵スベキモノナキハ、遺憾ノ極ミナリ。

資料Ⅱは、昭和十年に行われた教育研究会で花井弘義氏が発表することになった際、父親が書き記してくれたものという。また資料

IIIは、詞書きに

越中史編纂資料トシテ御尋ネノ義経ニ關スル資料別紙ノ相認

メ仕リ候也

明治四十一年一月十三日

西水橋町長 押田喜訓殿

とあるように、花井氏の祖父に当たる花井四郎右衛門氏が、越中史編纂の資料として明治四十一年に提出する時に書き留めたものである。両者とも、自分たちが聞いてきた家の伝説を、改めて書き留めた資料ということになる。

花井家に伝わる伝承をまとめると、

一、文治年間の五月、法師に身を替えた義経一行が、海岸を通り水橋に辿り着いた時、常願寺川を渡ろうとしたが梅雨のため増水していたので、渡ることができなかつた。

二、上流を辿ると一つの小さな八幡社を見つけたので、参拝した後、傍らにあつた花井氏の先祖の民家に宿を請い、三日間逗留した。

三、ようやく雨もあがり、水かも減つただらう、と出發するこ

#### IV 海士ヶ瀬の渡由来（軸装）

常願寺川往昔称海士瀬川其源出立山径數十里而到水橋驛入海急

四、川岸に来たけれどまだ水は減つておらず、困つているとどこからか一人の海士が現れた。義経は背負い向こう岸まで浅瀬を渡つてくれたので、義経は喜び礼を述べる。名を尋ねようとしたが、その時にはもう海士の姿はなかつた。これは日頃から崇拝している八幡神のお陰に違ひない、と義経は八幡社に再拝する。後、この渡しや地名を、「海士が瀬」と呼ぶようになつた。

五、また義経一行の逗留中、草餅をついて歓待した由来から、毎年五月十四日には草餅をつき親戚に配布する習いがある。

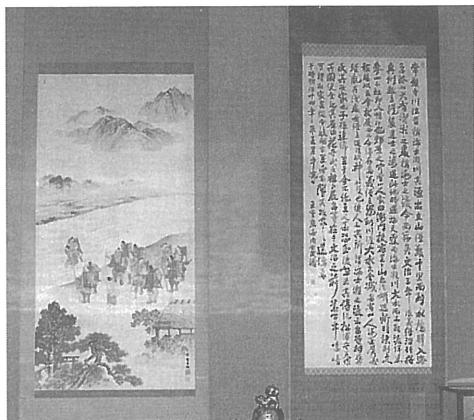
ということである。

『北国奇談巡杖記』にも記されているが、花井家の先祖は保元の乱で讃岐院の味方をした後、都から当地へ来て住み、敵の目を欺くために八幡大明神を守護神として祀つてきた、と伝えられている。「八幡はん」と呼ばれたそこに立つ一本杉は、畠等に住む人々にとつては畏敬をもつて信仰された心のよりどころであつたが、昭和三十五年一月に落雷で炎上したため、切り倒され、今は跡地に石碑が建てられている。一説に、義経から賜つた品々は、源氏にゆかりある八幡社跡に埋蔵した、ともいわれている。

花井氏宅の床の間には、写真Aに示したように、左にはa絵画、右にはb漢文の書という、二幅の掛け軸が掛けられている。漢文の内容は、資料IVの通りである。

(写真A)  
花井氏宅の床の間  
(下は拡大)

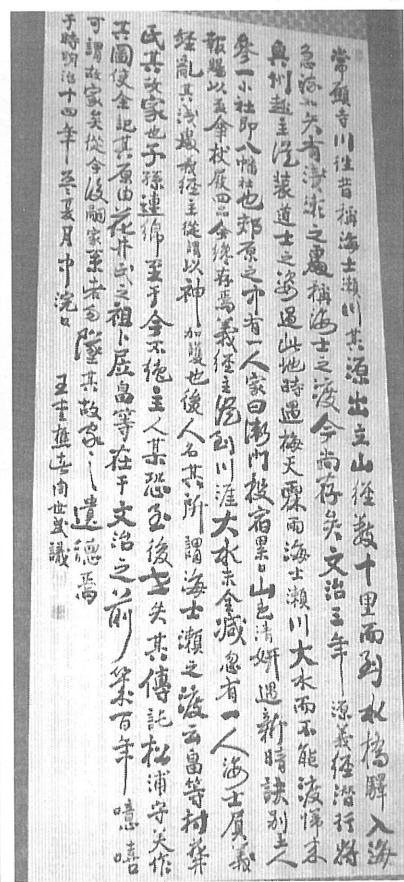
左：a  
右：b



b



a



井氏之祖ト星島等在于文治之前築  
百年嘵嘻可謂故家矣從今後嗣家系  
者勿墜其故家之遺德焉

于時明治十四年孟夏月中浣  
王奎樵喜聞世民識

aの絵画は、明治初期に春岳森政といふ京都の人が描いたといふもの、bの書は富山市出身の漢学者・王奎樵が明治十四年に書いたもので、どちらも祖父の四郎右衛門氏の代の品である。



↓写真B



写真 A—a の拡大↑

流如矢有淺瀬之處称海士之渡今尚存矣文治三年源義經潛行將與州赴主從裝道士之姿過此地時遇梅天霖雨海士瀬川大水而不能渡

帰來參一小社即八幡社也郊原之寸有一人家曰漸門投宿累日山色

清妍遇新晴訣別主人報賜以盃傘杖履四品余纔存焉義經主從到川  
涯大水未全域忽有一人海士原義經亂其淺處義經主從謂以神加護  
也後人名其所謂海士瀬之渡云畠等村花卉氏其故家也子孫連綿至  
于今不德主人某恐玉後世失其傳託松浦守美作其圖使余記原由花

四郎右衛門氏から話を聞いて作品にしたということは、先ほどのⅢ「畠等における伝説」と見合わせてみると分かる。

同じ家に伝わる話ではあるが、花卉氏の父と祖父の伝える内容には、若干の異同がある。比べると、父の記したⅡ「越中郷土史物語」では、①義經主從の人数は十一人②贈られた品は傘・盃・金剛杖・鎌である、のに対し、祖父の記したⅢ「畠等における伝説」では、①人數は十二人②贈られた品は金剛杖・盃・笠・履物となつて

いる。掛け軸と照合すると、それぞれ、Ⅲとbの品・aの人数が一致している。

絵画についてもう少し具体的に比較・考察を加えたい。

写真Bは、嘉永七（一八五四）年、富山藩の絵師として活躍し、

初期元葉版画の下絵を手がけたことで有名な松浦応真斎守美によつて描かれた板絵馬である。「海士ヶ瀬の渡し図」という題で、俳句

の上達祈願のため水橋神社に奉納された、県内最大のものという。

題材は、地域に伝わる義経伝説から取つてあるものの、花井家で

伝える内容とは多少異なっている。ここには、義経主従が川を渡る際に浅瀬を教えたのは、水橋神社の神の化身である、その後詣でた

Aでは、主従十二名、背負われている義経について

古くから伝わる義経伝説とともに先祖の姿も描かれているからである。

史実的には信憑性があるのか疑わしいが、先祖の肖像として尊

び毎日礼拝することで、家系を守り子孫としての戒めを持つ、旧家

としての誇りと人格・責任を意識するのだという。それは、一村一

社である八幡社を大切にしていた心構えにも、同様に表れている。

北陸の義経伝説にはしばしば、海や川を船で渡る、という話が聞

かれる。その代表的なものには、謡曲「安宅」・歌舞伎「勧進帳」

のモチーフになつたとされる、如意の渡の伝承が挙げられる。この

水橋町畠等は、早くから船の渡し場（関所）が近くに設置され、水

橋将監が水橋の渡りを管理していたという。現在史実にこの人物を見いだすことはできないが、義経と水橋将監との親交を窺わせる伝

承もある。<sup>(6)</sup>このような文学的・地理的に条件が揃つてゐるにも関わ

また、それぞれの服装から人物を眺めると、海士・山伏姿の人物達に混じり、羽織を着てゐる人に気づくであろう。この人物こそ義経を見送る花井氏の先祖とされ、画中には茅葺きの花井宅、松に並ぶ一本杉とその根本に祀られている八幡社、そして遠景には剣岳も見えてゐる。

一方、Bにおいては、主従十二名、背負われている義経について半分の従者も一緒に浅瀬に入つてゐる。陸に居る残りの者の中に、こちらはさらに女性らしく描かれている赤い衣の人物が、弁慶らしい人物に手を引かれている。ただここには、杉の木・社・剣岳は描かれていない、という点がAと異なる。

花井氏宅でこれらAの掛け軸を家宝として常に掲げてゐる理由は、二十年に山口吉社から水橋神社へと復称する際の証拠書類として提出された、という伝承と歴史がある。Bも義経が一人の海士に背負われて川を渡つてゐるという構図であるが、AとBの二つを比較すると、次のような異同に気がつく。

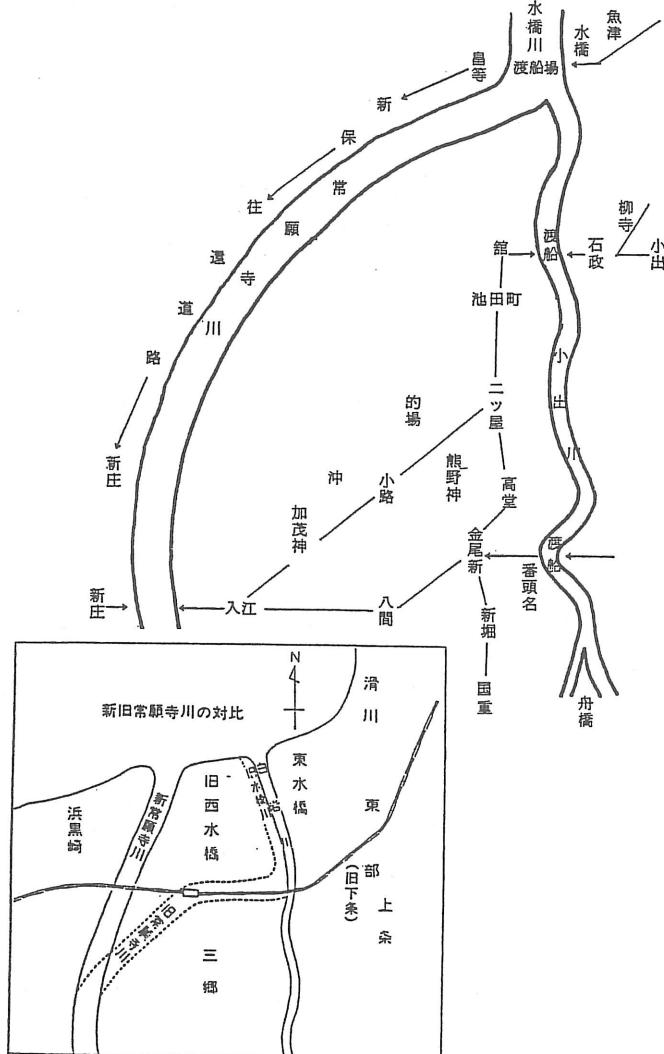
Aでは、主従十二名、背負われている小柄な男・義経を見守る従者達が陸に居り、真ん中には弁慶らしき大柄な男が、女人とおぼしき人の手をいたわるように引いてゐる。花井家で書き留められた伝説の文言の中に直接女性が登場するわけではないが、詳細な名前は知らないが義経一行に一人女性がいた、とされる。それが絵画にも表れていよう。一見御曹司のように見えるが、まず背負われたのが義経であること、顔つきや雰囲気が女性らしいということで、この真ん中の白い衣をまとつた人物は、同行した女性と判断されている。

らず、伝説の主人公達は足で川を渡つてゐる。一体、「川を渡る」ということに、どのような意味や背景があるのだろうか。

地図Cは、「畠等のあゆみ」から引用した水橋地域を表示したものである。この地域は、北アルプスから流れ来る常願寺川と小出川

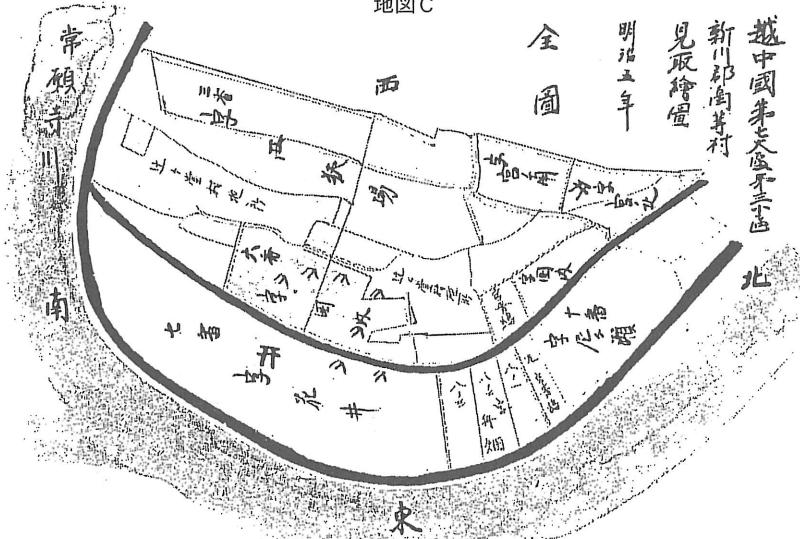
とが合わさり北の富山湾に注ぐ水橋川の、ちょうど合流点に当たつていた。南北には北陸街道が走り、水橋の渡しは

わたりは  
しかすがのわたり  
こりずまのわたり  
水はしのわたり



## 地図 C

地図C



と『枕草子』にも記される程古くからの交通の要衝である。常願寺川は、富山の七大河川の一つにも挙げられ、「出水なきを常に願う」という思いから名付けられたとされるように、豊かな水の恩恵を受ける一方で、常に洪水に見舞われるという被害の歴史がある。急流の常願寺川が曲折した水害の受けやすい所にある畠等の中で、急カーブのために水がよどみ浅瀬ができる地点が、義経伝説跡である。そこの大井家敷地からは、かつて銘酒を作り出すほどの清水がわき出ていたともいう。

文政年間に金沢に生まれ、明治四十一（一九〇八）年に没した森田柿園が晩年にまとめた『越中志徴』は、加越能三州の郷土史研究に貢献する郷土誌である。文中『北国奇談巡杖記』中の水橋の義経伝説を紹介しつつ、以下のような記載もある。

#### 水橋渡古傳説

三州奇談に、水橋の渡りは、常願寺川の末にして甚深く、水所々より落合ふといへども、あまが瀬といふ渡りあり。義経與州下りの頃畑等右衛門といふ者此渡り瀬を教へしとて、今に畑等清兵衛とて百姓の中に其後孫あり、今も飛脚などは此家に渡りを習ふて打渡り、舟の隙入をまぬかるとかや。世には飛鳥川も有に、数百年のけふ迄瀬替らざるも又妙なり云々。

明治時代になって行われた河川改修によつて、水橋川は新常願寺川と白岩川とに分離・削減され、現在ではだいぶ景色も変わつてしまつた。しかし、暴雨川と共に生きる人々には、生活感情に伴つて、着実に信仰や文学が誕生してきたようだ。

義經一行が舟を使わずに川を渡りきつた、という伝説に、無事に川を渡るための判断と知恵、祈りが窺えてくる。

### 三

「川を渡る静御前」の伝承を考索するにあたり、群馬県前橋市の例を参考にしたい。

〔表一〕・上野（群馬）の静御前伝説

前橋市三河町〔養行寺〕塔	塔像	亡くなつた静を供養する多
重塔	天神塚に納められていた	*現在不明
岩神町（静家）	大渡を渡した、又病に罹つた静を看病、礼に姓を名乗らせた	大渡を渡した、又病に罹つた静を看病、礼に姓を名乗らせた
祠	静の墓（同じ敷地に静家代々の墓）	静の墓（同じ敷地に静家代々の墓）
〔勧民稻荷〕鏡	静持參の三点で、御神体となる	静持參の三点で、御神体となる

一つは、貞享元年（一六八四年）の『前橋風土記』「墳墓 古蹟」に 静墓

在「于城中」矣今天神山是也相伝葬「機禪司女義經之妾靜」之所也按此地往古自「京師」到「謙倉」之駅路也靜召「鎌倉」而欲帰洛過「此地」之序死「于是」葬乎他「妾有「名」靜者」乎不「知」其可否也古有「石碑」且天神社如今移「郭外」養行寺林中矣天神之像用「片板」長尺計画「像於其上」朽蠹而失「其半」相伝是出「墓中」之物也

とある、元は前橋城内の天神山にあつた供養塔である。

前橋城下の岩神町と利根川対岸の総社町との間は大渡橋で結ばれ、川の渡場を監視する大渡関所があつた。そこを流れる利根川は、大洪水になると猛威を振つたため、「坂東太郎」の異名をとつてゐる。城や城内にあつた養行寺が崩壊し、現在の市中央部の三河町へ寺が移転する時、天神山の供養塔も共に移されたのだが、また、塔の下から石一つに経一字を書いた小石がいくつも出土したという、一石一字塔も一緒に移動している。一石一字塔は、渡りで亡くなつた人を供養するという性格がある。おそらくこの静御前の供養塔も、そのような性格があつたのではないか、と考えられている。

もう一つは、静家の墓地の一角にある静御前の墓である。大渡に着いた時、川を渡してくれた渡守への礼に、自分の名を姓名として名乗らせた、あるいは川を渡つたが旅の疲れから病に罹り亡くなる時、介抱してくれた恩に姓名を名乗らせたという、「静姓の由

この地での静御前伝説は、義經を追い北陸を通り一人で来るが、とうとうこの地で力尽きた、というもので、墓は二つある。

「来」を伴つてゐる。また、墓地から南に約五十メートルの場所に建つ勧民稻荷神社は、一説に静御前から貰い受けたという遺愛の鏡を祀つてゐる。この神社は、生活用水・防火・水田への利用や、前橋城を囲む堀の水を引くために用いられた風呂川の改修に当たり、守護神として祀られたのが始まり、と伝えられている。

大河が生活の一部として存在する環境の中で、静御前は川を渡るものゝ亡くなつたという伝承により、そのまま川で命を落とした人々の代表の如く地域の人々にとつて供養の対象とされている様子が、ここには表れている。

### おわりに

水橋・前橋という、生活に恩恵と恐怖を与える大河川の川縁に伝えられてきた東日本型の静御前伝説を見てきた。例えば舞衣で有名な茨城県古河・埼玉県栗橋地域の静御前伝説も、利根川に面した交通の要衝に伝えられ、両者と同様、清らかで豊かな水をたたえた地に根付いてゐるという共通点がある。が、ここで殊に強調される特色は、「川を渡りきる」という営みの危険性と祈り、その根底にある信仰の強さであろう。

静御前の伝承には、「しづやしづ」と謡つた人物、という意識に支えられている印象をしばしば持つ。『神樂歌』<sup>(8)</sup>に

志都夜乃小菅  
如韓神音振  
本

しづやの小菅 鎌もて刈らば 生ひむや 小菅  
生ひむや 生ひむや 小菅

という風俗歌がある。この歌に対する「日本古典文学全集」の頭注の解説に注目したい。

『梁塵愚案抄』は菅の名とし、『神樂歌新釈』は「賤家」とするが、『神樂歌人文』『梁塵後抄』の説くように地名であろう。

古くあてられた「閑野」が妥当であるかは明らかではない。『神樂歌入文』が「東国の田舎にて蘆葦等の生ふる所をやといひ、低き地を下谷と云へるに合せ見れば、野沢の水づける地を

云ふもあるべし」と示唆しており、ヤは低湿地を意味するヤチ・ヤツ・ヤトの略称で、東日本に多く用いられる。「しづや」は閑静な低湿地帯を意味する地名となるが、どこかは未詳。

その地は、豊かな水を湛え、恩恵を授かる閑静な時間があつた。一方で、雨による増水は、ひとたび暴れ出したら人間の力ではなす術もない荒々しさに襲われる。大地を鎮め納めたいという心情の両方を抱える土地においては、「しづや」という言葉が人々に訴える響きを持っていたように思われる。無事に渡るための神の加護、自然の中で生きる厳しさ、という人々の歴史と心情が、山を称え川を鎮めるという文学・伝説を生み、また受け入れていったのではないだろうか。そして個々においては、危険の少ない浅瀬を知る知恵、浅瀬を教えてもらつた神に対する感謝、また川を渡ることを助けた先祖に対する誇りを通じ、生活を省みる契機としての機能をこの静

御前伝説は果たしているように思う。

伝説を語り歩く存在の考察はまた機会を設けるとして、今後は、文芸と旅人との関わりについて、修験者や芸能者と同様、富山の薬売りの存在に着目したい。彼らはお得意様にサービスするための一芸に越中淨瑠璃を身につけ、淨瑠璃は昭和初期まで盛んであつたと。文芸の題材となる伝説は、このような場面でも、郷土の誇りを与えるものとして機能していたことと思う。

#### 注

- (1) 義経記 梶原正昭校注訳 小学館 一九七一  
(2) 日本の伝説24 富山の伝説 辺見じゅん・大島廣志・石崎直義  
角川書店 一九七七  
(3) 北国奇談巡杖記 鳥翠台北墓 日本隨筆大成 吉川弘文館  
(4) 二〇〇〇・二・一〇現地調査による花井弘義氏からの資料提  
示。

(5) 嶋等のあゆみ 水橋島等町々内会 一九八四  
なお、花井弘義氏提供による資料を元に訂正を加えた。

(6)「水橋氏 義経吾妻下りといふ舞本に、六渡寺の渡りを越え、是より末は水橋殿を頼んと云々」(『越中志徵』)  
また、「当時の城主水橋将監 義経一行を迎へ手厚くもてなした」(『水橋郷土資料館二十年のあゆみ』一九九八)という伝承の紹介があるが、年代の開きが認められることから史実として疑問視もされている。

(7) 前橋風土記 古市剛 続々群書類從8 図書刊行会 一九七〇

(8) 日本古典文学全集25 白田甚五郎・新間進一校注訳 小学館 一九七六

#### 参考文献

- ・越中の中世文学 綿抜豊昭 桂書房 一九九一  
・越中の文学と風土 廣瀬誠 桂書房 一九九八  
・水橋の歴史3 水橋郷土歴史会編 新響社 一九九五  
・みづはしの絵馬 水橋郷土史料館 新響社 一九八九  
・富山における義経伝説の諸相 石崎直義  
・(郷土の文化 富山県郷土史会 富山県立図書館 一九七八)  
・静終焉の地と前橋 中村吉太郎 上毛と上毛人80

#### 附記

富山市水橋町ならびに前橋市の伝説調査にあたり多くの方々に御厚意を賜りました。記して感謝申し上げます。

(ないとう・ひろよ／國學院大學大学院)